

はじめに

まちづくり三法に基づいた「中心市街地活性化プラン」の作成・実行に象徴される地域再生、まちおこしの動きは全国で見られ、成功例も報告されるようになった。

たとえば、首長の強力なリーダーシップ“すべては市民のみなさんの笑顔のために”をスローガンとして行政が一丸となって、素晴らしいまちづくりに成功している群馬県太田市。

行政に支えられ、商業者のリーダーに人を得て、まちなかの再開発に成功している青森県青森市。

“人口を増やす”という課題に向かって、行政が「おもてなしの心」と「投資マインド」で企業誘致に努力している岩手県北上市。

これらの多くの事例が行政主導で実施されている中で特筆すべきは、高知県高松市の丸亀町まちづくりの取り組みである。このケースは、行政の計画にはなかった再開発を地元が自らやりたいと言い出し、行政は、その意向を汲み取って上手に支援し実現へこぎつけた。

更に、新潟県の村上市のまちづくりでは、行政による大規模な「近代化計画」に対し、心ある市民がふるさとを守るため、立ち上がったことに端を発したと言うのである。

今回の『まちづくり三法』が改正され「コンパクトでにぎわいあふれるまちづくり」が、より明確に標榜され「人口減少等社会における市街地の再編に対応した建築物整備のあり方」もまとめられた。いよいよ、地域のやる気の有る無しで、相当の格差が生じる事は必至であり、このチャンスに乗り遅れば、その地域は取り残され、中心市街地はこのまま壊滅へと追い込まれる危機感すら感じる。

今回事例で取り上げる茨城県石岡市は、真にその崖っ淵で“まちなか消滅”の危機に瀕している。

1300年の昔、常陸國の国衙が栄え、つい30年前までは、県央の商都としてその中心商店街は周辺の町や村からの買い物客でにぎわっていた。第一次商圏人口は、最大で約17万人を超え、地域の商業の中心地域としての役割を担っていたのである。

しかし、平成に入り、全国の地方都市がそうであったように、郊外のロードサイド、6号国道沿いに、大型のチェーン店が次々に出店するよう



常陸國の古代交通路「国府」の場所が石岡である

なり、“まちなか”は空洞化、今、その灯りは消えかかっている。

そのようななか、更に“とどめ”とも言うべき、悪材料が降り掛かっている。80余年の長きに渡り石岡市の東方に位置する鹿行地域から人々を運んで来た鹿島鉄道（石岡↔鉾田線）の廃線が決定したのである。

2009年には、「茨城空港」（自衛隊百里基地の民間共用）の開港が予定される事も有りそのアクセスの為に今後、一部なりともこの鉄路が活用される可能性がゼロとは言えなくとも、当面、石岡へつながる鉄路がなくなるという。石岡のまちなかにとっては、最悪の事態が起きているのである。

石岡市史によれば、大正11年9月に行われた『鹿島参宮鉄道株式会社』の設立創会の後、用地の買収などに乗りだした際に、沿線となる町村の住民の理解協力を得るために配布したパンフレットにはこのように記されていた。

『石岡町は茨城県第二の大都会で清酒・醤油の醸造で知られ、また小川町には米穀、肥料などの大商人がおり、玉造町付近は霞ヶ浦をよく臨み風景よく、本鉄道ができた暁には東京の別荘地遊覧地となります。また将来終点となる鉾田町には郡役所、警察署はもちろん、中学校、葉たばこ収納所などもあって発展しつつある町です。この四大市街を連ねうる有利な鉄路は茨城県にその比なく他府県も例が少ないことです。とくに鉾田町で開通のうへは、鹿島軌道、北浦汽船と連絡して鹿島参宮に参詣する道順となり、いかに将来が有望なるか察することができます。しかしながら、鉄路は、その地方の賛助がなければ完成できません。従って沿道各町村の有志諸君の共同事業となし、そして快くみなさんの賛助を受け、一刻も早く鉄路を開通させたい考えです。』

真に誇るべき郷土をより発展させようとする石岡商人の心意気に溢れる文章である。石岡市の再興を願うとき、関係者はこの気概をもう一度奮い起こさねばならない。このように、アクセスとしての鉄路を残し『茨城空港』の玄関口となる石岡のまちなかも蘇らせ、次の世代へとつなげていくことが最も望ましい。

そんな危険状況に陥っている石岡市にも2001年2月に発表された『中心市街地活性化プラン』がある。（資料P58）

「石岡市が、市民と商業者及び関係機関との連携を図りながら、中心市街地の活性化を重点的・効果的に進めるため、中心市街地の区域を提示し、整備の方向、目標等を定めるとともに、おおむね5年以内に着手出来ると考えられる事業を示すもの」として作成されているが、発表から6

年経過した今、“まちなか”の状況は、より深刻な事態に瀕しているのである。

まず、先人の志を継ぐべく現状をふまえて前述の大正11年のパンフレットの文をまねて記してみる。

『石岡市は、茨城県の中央に位置し、その昔、国衙が栄えた古都であります。旧小川町に、近く『茨城空港』ができた暁には、年間80万人の利用が見込まれ、石岡市がその玄関口となります。また、常磐自動車道の『千代田・石岡 I C』、建設が予定されている『石岡北 I C（仮称）』と J R 常磐線の急行停車駅、更には、石岡⇄鉾田線の始発駅（平成19年3月まで）を併せ持つ有利な立地条件は茨城県内にその比なく他府県でも例が少ないことです。とくに、石岡駅前、中心市街地活性化の中核施設として『常陸國文化ホール（仮称）』等の集客施設が完成のうへは、北は仙台、南は上野からの集客も可能となり、いかに将来が有望なるか察することができます。』

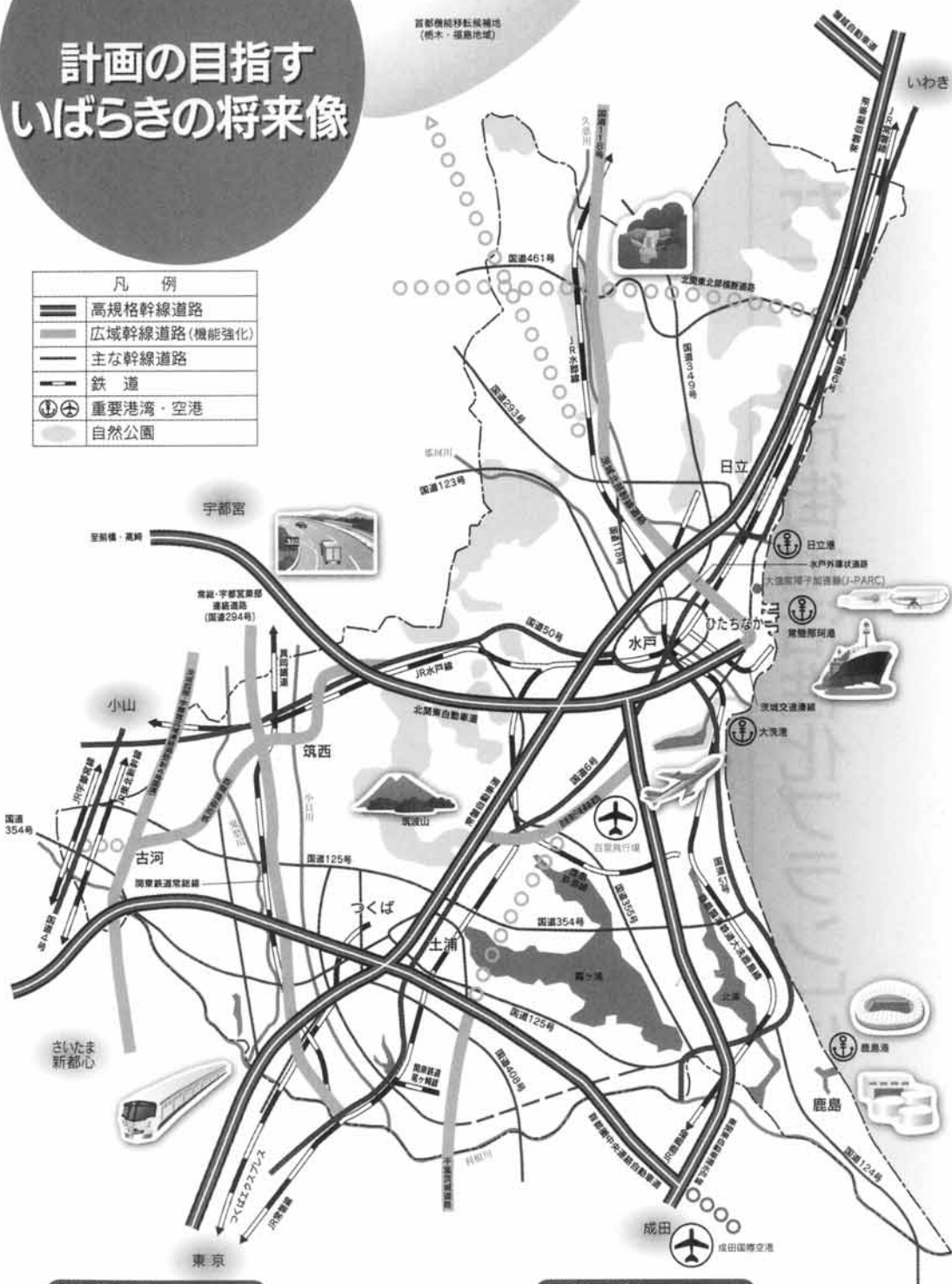
しかしながら、中心市街地の活性は、地元の賛助がなければ完成できません。従って、市民住民の有志諸君の共同事業となし、快くみなさんの賛助を受け、一刻も早く“まちなか”の再生を成し遂げたい考えです。』

「TMOもやりました。まちづくり会社も設立しています。乗り合いタクシーだってあります…」
商工会議所の孤軍奮闘にも市民の参加は振るわぬまま、どの街でも横並びにやっている型通りの取り組みに陥っている石岡市にあっては、“何か”を起爆剤にしてこの危機を突破して行かなければならないと考えられる。

前線で最後のとりでを守る様な街の事業主と住民の熱い決起に期待しながら、本調査研究に取り組みたい。

計画の目指す いばらきの将来像

凡例	
	高規格幹線道路
	広域幹線道路(機能強化)
	主な幹線道路
	鉄道
	重要港湾・空港
	自然公園



人口の見通し

2015(H27)年頃まではおおむね295~300万人程度で推移し、2030(H42)年頃にはおおむね270~285万人程度になると見込まれます。

経済の見通し

本県経済は、全国を上回る水準で安定的に拡大を続け、2015(H27)年度までの実質経済成長率は1.9%程度、名目経済成長率は2.4%程度になると見込まれます。

茨城県「元氣いばらき戦略プラン」より 残念なことに「石岡」の表示がない